

# 「主の道をまっすぐに」

(マタイ3:1~12)

挽地茂男

2019.1.13 日本基督教団千歳丘教会

クリスマス、お正月といわゆる「祭」と呼ばれる時期が過ぎて、会社や学校が営業や授業を開始し、日常が始まりました。「祭」とは元来、日常に対して非日常的な時の営みとして存在してきました。現代日本では多くの「祭」が非日常的な次元を喪失して、習俗や習慣として営まれています。

昔、学生だったころ、清朝末期の中国のキリスト教に関する文献を拝借するために、奈良県の天理市にあるある中国キリスト教の研究者のお宅を訪問したことがあります。〔実はキリスト教の文献は天理大学が日本で一二を争う質と量を持っています。〕天理大学の教授で——天理市にお住まいだったので、そうではないかと思っていたのですが——実はその先生は天理教徒だったのです。おたずねして、部屋に通していただくと、(天理教徒なのに)クリスマスツリーが飾ってありました。「年中行事ですから。子供たちも楽しみにしています」と少してれながら、釈明

をしておられました。現在では、宗教に関係なく、ごくふつうの家でもイルミネーションで垣根や玄関を飾ったり、クリスマスツリーを飾ったりすることが多くなって参りました。クリスマスのプレゼントやパーティー、いろいろなクリスマス・ソング、クリスマス・ケーキやディナー。街角にはさまざまなお店のショーウィンドウなど、お祭り気分、祝祭的な華やいだ雰囲気が増しに(あるいは年ごとに)強くなっているように思います。クリスマスはキリスト教の祭でありながら、キリスト教国でもない日本の国の冬の風物詩に、見事になってしまった感があります。

「祭」(まつり)を語源的に調べてまいりますと、①神を「待つ」(神の到来を待つ)、②神に「奉る」(神に献げ物をする)、③神に「服ふ」(神に仕える)等が上げられております。クリスマスとは、





アドベントから、救いの神を新たな気持ちで「待ち望み」、神さまがイエス・キリストを世に遣わすことによって成し遂げてくださった救いに感謝をしつつ献げものを「奉り(献げ)」、その神様に喜びをもって「服ふ(仕える)」ということを確認する「とき」であります。

いずれにせよ、祭の「とき」は、一旦日常からの離れた、凡俗から離れた非凡非俗の常ならぬ「とき」です。日本語には〈秋〉という字を〈とき〉と読んで、この〈非日常〉的な時を表現することがあります。(イ) 天地の稔り・収穫の秋(とき)。この〈とき〉に秋の字を当てます。また(ロ) 国家の危機存亡の秋(とき)。この〈とき〉にも秋の字を当てます。そしてこの天地の稔り・収穫の〈とき〉、また国家の危機存亡の〈とき〉に神が絡んできます。人間を超えた超越的な力が介在するのです。人

間を超えた神の力が稔りをもたらし、国を護るのです。そこに祭が現れるのです。稔りの〈秋(とき)〉には収穫感謝祭が、国家の危機に際しては、護国祈願の儀式が行われたりするのです。この〈秋〉であらわされる〈とき〉は、日常の時と区別される常ならぬ重大な時が表わされているのです。

またこれと似た表現で、非日常と日常を区別する〈ハレ〉と〈ケ〉という言い方があります。〈ケ〉は漢字の猥褻わいせつの褻なの字——訓読みで「褻けがれる」とか「褻なれる」という字——に、もう一つの音読み〈ケ〉を当てます。〈ハレ〉はお天気が晴れるの「晴れ」を使います。これによって日常の〈ケ〉の時に対して、非日常的な〈ハレ〉の時を区別します。〈ハレ〉で今日ご結婚のご両人に、友人を代表してご挨拶申し上げます。とか、今日〈ハレ〉で本学に入学された新入生諸君には、というように日常的な〈とき〉と区別された〈とき〉に使われます。正月



や、成人式などもそうです。日常の俗なる〈ケ〉の〈とき〉に対して、非日常の聖なる〈ハレ〉の〈とき〉には、普段着や作業着ではなく、〈晴着〉を着てその日を祝うのです。この非日常の〈ハレ〉の時は、社会集団の生活のリズムが一層高まるとき、人々が集団的に凝集する時であります。このような祭から神を切り離すと、それは一般的な、文化や習俗・習慣になっていきます。このような文化や



リオのカーニバル

習俗もまったく無意味なものとは言い切れませんが、これが商業資本と結びついたりすると、本来の意味の喪失が加速されます。ともかくも主イエス・キリストの父なる神を知る者にとっては、祭としてのクリスマスは、神を「待ち」、神に「奉り」、神に「服ふ」〈とき〉であります。

また祭は内容の点で2つの要素から成り立ちます。祭のエネルギーが向かう二つの方向性<sup>ベクトル</sup>と言い換えてもよいかもしれません。まず

①儀式(祭儀)の要素。きまりを遵守しながら様式化した定型的行為を厳しく執り行なうきわめて厳粛な儀式の局面です。ふつう宗教学で「過度の秩序」と呼ばれる局面(方向性)であります。もう一つは②祝祭。つまり「儀式」(祭儀)の局面とはうって変わったお祝い、お祭り騒ぎ、激しい祭になればいわゆる、無礼講や乱痴気騒ぎが奨励されます。リオのカーニバル(謝肉祭<sup>しじゆんせつ</sup>。カトリック教国で、四旬節[肉断ちと懺悔の期間=受難節]の直前に3日ないし1週間にわたって行われる祝祭。本来は、冬の悪霊追放、春の豊作・幸運祈願に由来し、仮装行列を伴いしばしば狂騒的となる)などを見るとよくわかりますが、そこでは日常的な秩序が無秩序に逆転します。コスモスからカオス<sup>コスモス</sup>へ、という言い方がなされます。秩序〔κόσμος 宇宙とか世界とか秩序と訳されます〕から混沌〔καός<sup>カオス</sup> 混沌, 無秩序. 宇宙創造の原時点の状態、世界創造の前の原初〕への逆戻りの局面で



ドイツのヴォルフアツハのカーニバル

す。祭にともなう仮装は、例えば農民が王様の姿に仮装したり、男が女に仮装したり、逆に貴族が百姓や労働者に仮装したり、女が男の姿に仮装したりするのも、一時的に社会秩序を逆転させてしまうものなのです。これによって社会は再び新たな生命力によみがえることができることになります。人々は一種の集団的エクスタシーの境地に投げ込まれる、ふつう「過度の放縦」と呼ばれる局面(方向性)です。厳粛な儀式とドラマチックな祝祭とが、対照をなしつつ組み合わせられて、一つの祭を形作ります。

本日わたしたちに与えられた聖書の箇所は、伝統的な聖書日課では、クリスマスの時期に読まれる箇所なのです。この箇所をキリスト教の祭であるクリスマスとの関連で読みますと、この箇所をクリスマスの時期に読む伝統的な聖書日課の〈意図〉が見えてまいります。それは祭の〈儀式(祭儀)〉の厳粛な局面と関連しています。それは神の前にある「過度の秩序」の方向を指す「根本的な秩序」を指し示しています。神の御前にある人間のあるべき姿を指し示します。今年のアドベントの時期は「口

ゴス賛歌」に集中しましたので、この箇所を取り上げることができませんでした。しかし「野のゆり」の十時先生の記事が、クリスマスの準備としての「悔い改めと祈りの必要」について語ってくださいましたので、お読みいただきたいと思います。少し時機を逸しましたが、クリスマスから余り時間がたたないうちに学んでおきたいと思います。

この箇所は予想されるように「悔い改め」を強調して、イエス・キリストの到来に道備えをする洗礼者ヨハネの宣教活動が描かれています。3章1-2節「**その頃、洗礼者ヨハネが現れて、ユダヤの荒れ野で宣べ伝え、『悔い改めよ。天の国は近づいた』**と言った。」この洗礼者ヨハネの



ポッティチェリ「洗礼者ヨハネ」

備えた道がイエス・キリストの道につながっていることは、主イエスの宣教の第一声をみるとわかります。マタイによる福音書4章17節にその第一声が記されています。まず12節で状況が示されます。「**イエスは、ヨハネが捕らえられた**

と聞き、ガリラヤに退かれ」、そして主イエスの第一声、17節。「そのと



きから、イエスは、『悔い改めよ。天の国は近づいた』と言って、宣べ伝え始められた。」どちらの

メッセージも、「悔い改めよ。天の国は近づいた」と「悔い改め」が強調されています。

この「悔い改め」の強い要求は、「ファリサイ派やサドカイ派の人々」が洗礼を受けにヨハネの許にやってきたときに、激しく噴出します。3章7-10節。

3:7 ヨハネは、ファリサイ派やサドカイ派の人々が大勢、洗礼を受けに来たのを見て、こう言った。

「蝮の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、だれが教えたのか。

3:8 悔い改めにふさわしい実を結べ。3:9 『我々の父はアブラハムだ』などと思ってもみるな。言っ

ておくが、神はこんな石からでも、アブラハムの子たちを造り出すことができになる。3:10 斧は既に木の根元に置かれている。良い実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げ込まれる。

このヨハネの言葉を聞いて、ファ

リサイ派やサドカイ派の人々だけではなく、そばにいた民衆もびっくりしたことでしょう。福音書ではファリサイ派やサドカイ派の人々が、主イエスの敵対者・ライバル関係に置かれているために、わたしたちはまず彼らを「悪者扱い」しがちですが、当時の社会通念から言えば、彼らこそが当時の社会の倫理性を支え、社会の安定に貢献していた人たちなのです。その彼らをヨハネは「蝮の子ら」と呼ぶのです。そしてまた洗礼を受けて、悔い改めを表明し、神の怒りを免れねばならないと言ったのは、ヨハネ自身なのに、ヨハネは彼らが洗礼を受けにやってくると、歓迎するどころか、彼らに洗礼を授けることを拒んでい



グリューネヴァルト「洗礼者ヨハネ」

るのです。ヨハネは何を考えているのでしょうか。ファリサイ派やサドカイ派の人々の悔い改めが不十分だと言いたいのでしょうか。「悔い改めにふさわしい実を結べ」(8節)というヨハネの叱責は、彼らの悔い改めの不十分さを責めて

いるのでしょうか。

一般にわたしたちは、「悔い改める」ということを、心の中にある思いを変えたり、考え方を変えたり、行動を変えたりすることと、思っています。例えば、ギャンブルと酒で一家の生計まで台無しにしている父親が、「もう、ここでひとつ悔い改めて酒とギャンブルをやめよう」と考えて、悪い自分の生活習慣を捨てようとするこのように考えるのです。そのように自分の生活についての考えを変えること、そういうことが悔い改めだと思っているのです。しかしヨハネの言う悔い改めは、どうも違っているようです。



©2008MMBOX PRODUCTION

ヨハネの言う「悔い改め」はもっと人間の深い認識に根ざしたもののなのです。それは9節。「3:9 『我々の父はアブラハムだ』などと思ってもみるな。言うておくが、神はこんな石からでも、アブラハムの子たちを造り出すことができになる」という言葉の中にうかがうことが出来ます。当時「アブラハムの子」

(つまりアブラハムの子孫、イスラエル民族、ユダヤ人)であるということの特権的な意識は、民衆の中にこんな民間伝承を生み出していました。「たとえ地獄に墮ちるような罪を犯したとしても、地獄の門の前にはアブラハムがいて、『アブラハムの子』だと見ると、救い出して天国に送ってくれる。」〔「金持ちと乞食のラザロの物語」(ルカ16:19-31)の背後にもそのような民間伝承が想定できる。〕



「『我々の父はアブラハムだ』などと思ってもみるな」(3:9)とヨハネは激しく批判し、「言うておくが、神はこんな石からでも、アブラハムの子たちを造り出すことができになる」と責め立てます。ヨハネは「アブラハムの子」という彼らの主張がどれほど無価値なものであり、「アブラハムの子」という自意識(自負心)がどれほど空疎なものであるかを言おうとしているのでしょうか。いやむしろ、ヨハネの目は「石からでも、アブラハムの子たちを造り出すこ

とがおできになる」神に向いているのです。石ころからでもアブラハムの子を作り出す神に目が向かうところから、真の悔い改めは始まるのです。自分自身の内側を吟味することから始まるのではなく、わたしたちを創り、わたしたちを生かしておられる大いなる神の存在に、自分自身の創り主に思いが至るところから、精神と行動を含めた真の自己変革は始まるのです。アブラハムとその子孫であるイスラエルの民族が優秀であったから、神は彼らに目をとめられたのではないのです。それは神の恵み(恩寵)以外の何ものでもないのです。大事なものは「石ころ」に目をとめられる神なのです。その



神の前にある「石くれ」としての存在は、「恵み」以外に何ら誇るべきものがないのです。

血筋や血族など救いには何の役にも立たないのです。ヨハネは神に直面せよと迫るのです。

キリスト者ではないのですが、なかぎり中桐雅夫〔以前にもご紹介したと思います〕という詩人が次のような詩を書いています。

## 「世相」

人は、明るい火がともっていると思っている。

だが、罪を焼く火ではない。心を快く温めてくれる、ごまかしの火だ。

もし、人に心があればの話だが。われわれ、われわれという声ばかりで、まるでいつも傍らに誰かがいてくれるようだ。

死ぬ時は、人は一人で死ぬ。そんなことも分からぬらしい。だから、小鳥の声などは聞かないのだ。

棺おけの中でもトランジスターのボリュームを上げたがる。

この信仰なき国の詩人たちが、神なる言葉を誤用するのも、何ら異とするにあたらぬ。

繰り返しますが、この詩人はキリスト者ではありません。しかしこの詩は、キリスト者ではない人の言葉は聞くに値しないと、突き返すことができるようなものではないでしょう。「人は、明るい火がともっていると思っている。／だが、



罪を焼く火ではない。」わたしたちの宗教とか、信仰というのも、我々の存在の根本に巣くっている罪など問題にしないで、快く暖めてくれる火のようなものではないのか、と問いかけてきます。わたしたちが存在を芯から焼き尽くすような炎に身を晒すことなんかできないし、そんな気持ちすらないとしたら、いったい、そういうところで問題になる存在の根本とは何なのでしょう。人は一人で死ぬ。神の前で裸で立つ。誰も側にいてくれはしない。神の目の前で、初めて晒し出されるような、自分の一番奥深いところにある心根、根性が問われる。この国の、神なる言葉を口にする詩人たちも、一度、神の前に素っ裸で立ってみたらどうか。彼らはそれができないで誤魔化しているだけだ。「この国」というのは、日本のことです。詩人はこの国の詩人に向かって、一所懸命、人生の真実を歌っているようだけれども、そういう経験を持たない詩、つまり、本当の神様の前に立つことを知らないで、神を歌ってみたって、神に迷える人を気取ってみたって、何になるか。そんな宗教芝居にどれほどの

意味があるのか。そう問うのです。



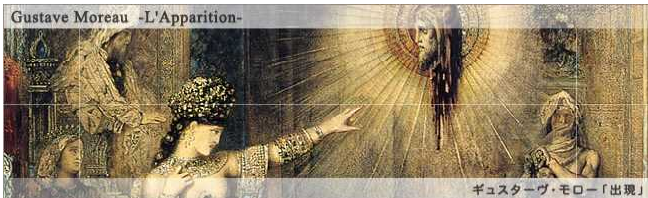
太宰治の短編小説に「トカトントン」〔これも説教の中でよく引用いたします〕という作品があります。ある作家のところ

にある青年から手紙が送られて来ます。彼は、太平洋戦争の終戦の日。死のうと思ったが、どこからか響いてきた、「トカトントン」という音を耳にすると急に冷めた気持ちになってしまった、というのです。戦後、小説を書いて発表しようとする、また、あの「トカトントン」が響いてきて、やる気が失せてしまう。それからというもの、何かをやろうとすると、すぐに、「トカトントン」が聞こえてくる。職場の仕事に打ち込んでみたり、熱烈な恋愛をしてみたり、政治運動に取り組もうとしたり、スポーツをやってみたり……だが、どれも途中で「トカトントン」が聞こえてきて、やる気を無くしてしまう。どうしたらよいのだろうか、と尋ねます。それに対して、作家はある聖書の言葉をひ



とこと、彼に送ります。

「身を殺して靈魂（たましい）をころし得ぬ者どもを懼（おそ）るな、身と靈魂とをゲヘナにて滅し得る者をおそれよ」（マタ10:28）



「あれは殺されたはずの洗礼者ヨハネの首か?!」

悔い改めというのは、わたしたちの存在、思いも行為も何もかもひっくるめて、全存在といたらよいかも知れないし、あるいはその存在の一番深いところ、根本の所と言ってもよいと思うのですけれども、そここのところで向きが変わるといえることです。わたしたち自身の全存在の方向が変わってしまうのです。

キリストの十字架は、神の愛の現われであると同時に、神の正義の現われでもあるのです。神の正義は、けっして罪に甘くはありません。きわめて厳しいのです。その厳しさのゆえに、人間を愛しつつ、ご自身の正義を貫徹するために、神はご自身の御子を十字架にかけて処断したのです。パウロはこう言っています。

「神は…罪を取り除くために御子

（イエス・キリスト）を罪深い肉と同じ姿でこの世に送り、その肉において罪を罪として処断されたのです。」（ローマの信徒への手紙8:2-3〔新共同訳〕）イエス・キリストは、この世の罪を取り除くために生まれたのです。クリスマスとは、御子イエス・キリストが生まれたことをお祝いする祭です。そしてこの御子を待つ、待望するのがアドヴェントなのです。この方を待つ者にとって一番大切なのは、その来臨の目的に沿って待つことです。

アドヴェントに、キリスト教の伝統的な聖書日課がこの箇所を選んでいる意味は大きいと思います。真の悔い改めなくして、真の祭はないからです。神に思いを向けて神を「待つ」こと、神に「奉る」こと、そして神に「服ふ」こと、それが「まつり(祭)」の本質です。時期的にはクリスマスは過ぎてしまいましたが、その精神は、祭の後にも生きていなければなりません。主イエスに託された神さまの思いに心を致しつつ、新しい一週歩みに向かってまいりましょう。祈りましょう。

2019.1.13 日本基督教団千歳丘教会

3:1 そのころ、洗礼者ヨハネが現れて、ユダヤの荒れ野で宣べ伝え、

3:2 「悔い改めよ。天の国は近づいた」と言った。

3:3 これは預言者イザヤによってこう言われている人である。

「荒れ野で叫ぶ者の声がする。『主の道を整え、／その道筋をまっすぐにせよ。』」

3:4 ヨハネは、らくだの毛衣を着、腰に革の帯を締め、いなごと野蜜を食べ物としていた。

3:5 そこで、エルサレムとユダヤ全土から、また、ヨルダン川沿いの地方一帯から、人々がヨハネのもとに来て、

3:6 罪を告白し、ヨルダン川で彼から洗礼を受けた。

3:7 ヨハネは、ファリサイ派やサドカイ派の人々が大勢、洗礼を受けに来たのを見て、こう言った。「蝮の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、だれが教えたのか。

3:8 悔い改めにふさわしい実を結べ。

3:9 『我々の父はアブラハムだ』などと思ってもみるな。言って

おくが、神はこんな石からでも、アブラハムの子たちを造り出すことがおできになる。

3:10 斧は既に木の根元に置かれている。良い実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げ込まれる。

3:11 わたしは、悔い改めに導くために、あなたたちに水で洗礼を授けているが、わたしの後から来る方は、わたしよりも優れておられる。わたしは、その履物をお脱がせする値打ちもない。その方は、聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる。

3:12 そして、手に箕を持って、脱穀場を隅々まできれいにし、麦を集めて倉に入れ、殻を消えることのない火で焼き払われる。」

Mat 3:1 Ἐν δὲ ταῖς ἡμέραις ἐκείναις παραγίνεται Ἰωάννης ὁ βαπτιστῆς κηρύσσων ἐν τῇ ἐρήμῳ τῆς Ἰουδαίας

Mat 3:2 [καὶ] λέγων· μετανοεῖτε· ἤγγικεν γὰρ ἡ βασιλεία τῶν οὐρανῶν.

Mat 3:3 οὗτος γὰρ ἐστὶν ὁ ῥηθεὶς διὰ Ἡσαΐου τοῦ προφήτου λέγοντος· φωνὴ βοῶντος ἐν τῇ ἐρήμῳ· ἐτοιμάσατε τὴν ὁδὸν κυρίου, εὐθείας ποιεῖτε τὰς τρίβους αὐτοῦ.

Mat 3:4 αὐτὸς δὲ ὁ Ἰωάννης εἶχεν τὸ ἔνδυμα αὐτοῦ ἀπὸ τριχῶν καμήλου καὶ ζώνην δερματίνην περὶ τὴν ὀσφύν αὐτοῦ, ἡ δὲ τροφή ἦν αὐτοῦ ἀκρίδες καὶ μέλι ἄγριον.

Mat 3:5 Τότε ἐξεπορεύετο πρὸς αὐτὸν Ἱεροσόλυμα καὶ πᾶσα ἡ Ἰουδαία καὶ πᾶσα ἡ περίχωρος τοῦ Ἰορδάνου,

Mat 3:6 καὶ ἐβαπτίζοντο ἐν τῷ Ἰορδάνῳ ποταμῷ ὑπὸ αὐτοῦ ἐξομολογούμενοι τὰς ἁμαρτίας αὐτῶν.

Mat 3:7 ἰδὼν δὲ πολλοὺς τῶν Φαρισαίων καὶ Σαδδουκαίων ἐρχομένους ἐπὶ τὸ βάπτισμα αὐτοῦ εἶπεν αὐτοῖς· γεννήματα ἐχιδνῶν, τίς ὑπέδειξεν ὑμῖν φυγεῖν ἀπὸ τῆς μελλούσης ὀργῆς;

Mat 3:8 ποιήσατε οὖν καρπὸν ἄξιον

τῆς μετανοίας

Mat 3:9 καὶ μὴ δόξητε λέγειν ἐν ἑαυτοῖς· πατέρα ἔχομεν τὸν Ἀβραάμ. λέγω γὰρ ὑμῖν ὅτι δύναται ὁ θεὸς ἐκ τῶν λίθων τούτων ἐγεῖραι τέκνα τῷ Ἀβραάμ.

Mat 3:10 ἤδη δὲ ἡ ἀξίνη πρὸς τὴν ῥίζαν τῶν δένδρων κεῖται· πᾶν οὖν δένδρον μὴ ποιοῦν καρπὸν καλὸν ἐκκόπτεται καὶ εἰς πῦρ βάλλεται.

Mat 3:11 Ἐγὼ μὲν ὑμᾶς βαπτίζω ἐν ὕδατι εἰς μετάνοιαν, ὁ δὲ ὀπίσω μου ἐρχόμενος ἰσχυρότερός μου ἐστίν, οὗ οὐκ εἰμὶ ἱκανὸς τὰ ὑποδήματα βαστάσαι· αὐτὸς ὑμᾶς βαπτίσει ἐν πνεύματι ἁγίῳ καὶ πυρὶ·

Mat 3:12 οὗ τὸ πτύον ἐν τῇ χειρὶ αὐτοῦ καὶ διακαθαριεῖ τὴν ἄλωνα αὐτοῦ καὶ συναῖξει τὸν σῖτον αὐτοῦ εἰς τὴν ἀποθήκην, τὸ δὲ ἄχυρον κατακαύσει πυρὶ ἀσβέστῳ.